

トリノオリンピックでの荒川静香選手の活躍により、フィギュアスケートへの関心は非常に高まっているが、全国的にスケート場の閉鎖が相次ぐなど練習環境などを取り巻く状況は厳しい。

庄内のスケート場についてもいくつかの紆余曲折を経て今日に至っている。私が地元鶴岡にUターンしてきた昭和62年、当時庄内では唯一のスケート場だったジャスコ鶴岡店のスケート場の維持存続並びに運営について相談を受けた。その際、スケートはレジャースポーツの位置付けが強く、また、スケート場は不良の集まり場所という見られ方をしていたため、小・中学校では閉鎖的な指導が行われていると聞いた。

そこで、鶴岡市体育協会が掲げる健全な人間づくりとしての競技スポーツの振興、また、社会的生涯スポーツとして広く庄内に広めること、さらには、学校側の認識を変えていこうと考え、鶴岡市スケート協会（現在は、庄内スケート協会）を設立した。

その後、平成4年開催の「べにばな国体」に向け急ピッチで地元選手の強化に当たった。そして、「べにばな国体」の前年度の「軽井沢国体」には、地元鶴岡市からフィギュアスケートに少年男子2名を出場させることができた。これは期間限定の狭いリンクというハンディの中では快挙であり、また、スケートに対して市民権を得たという実感の瞬間でもあった。さらに、平成6年開催の「上州国体」では、成年男子として天皇杯得点8位入賞を果たすことができた。

しかし、その年にジャスコ鶴岡店のスケート場は皮肉にも閉鎖となった。これは、入場者数が減ってやめるということだけでなく、運営会社の考え方で閉鎖が実行されてしまった。その時の状況は決して悪くはなく、その前年に鶴岡市の小真木原スケート場が出来たときも、相乗効果で入場者数は増えていた。また、スケート協会としても、この両方のリンクでのスケート教室の開催に大変忙しい日々をおくっていた。



スワンスケートリンク（酒田市）

酒田市のスワンスケートリンクと関わりを持つことになったのは平成6年であった。当時酒田市では、市営体育館を冬期間スケート場として活用しようとしていた。ただ、考え方としては、競技スポーツとしての位置付けでなく、レジャー的要素が強いもので、また、運営についてもダメだったら直ぐ止めようと考えていたようだった。

しかし、このことは、私たち協会にとっては、とても大変なことだった。もし、失敗して閉鎖すれば山形市の場合と同じようになると予測したからだ。当時、山形市では屋内スケート場の閉鎖に伴い負の

VALUE SIGHT

競技、レジャー、教育… 付加価値生むスケート場 競技団体と連携し開拓

フィギュアスケートへの関心が高まる一方、スケート場を取り巻く環境は厳しくなっている。庄内スケート協会副会長の富樫惣一氏に山形県のスケート場、フィギュアスケート競技の現状と課題を述べてもらった。

相乗効果が働き、山形厚生年金休暇センタースケート場（現在ウェルサンピア山形）の入場者数が激減していた。

そこで、これまでの反省等を踏まえ、当時酒田市の体育課に就任したばかりの課長さんに、レジャー的リンクの考え方だけでなく競技スポーツとしても位置付けること、短期的運営の考え方では結局は安物買いの銭失いになることなどのデメリットについて説明した。また、スケートの専門家としての立場から収支・運営・管理・競技団体との連携・長期的なビジョンについて提案させていただいた。そして、私の話素直に耳を傾けていただき、考え方を180度転換してもらった。スワンスケートリンクとの関係が今まで続いているのも、庄内スケート協会があるのも、その時の勇気ある決断のおかげだと思っている。

スワンスケートリンクは平成6年にオープンし、その年約3カ月足らずで入場者数3万3,000人を超す賑わいとなった。土日祝祭日・年末年始には、貸し靴待ちの状態で急ぎょ貸し靴を調達したほどだった。入場者数はその後も順調に推移し、今年12シーズン目の最終日には30万人を達成することができた。また、シニア、ジュニア、幼児など全部で5つのスケート教室の開催、小中高の学校の課外授業での利用にとフル活用されている。オープン5周年と10周年の時には、スケート協会と酒田市で協力し全日本チャンピオンチームである東京女子体育大学フィ

の競技も出発点は底辺の子供たちである。スケートの楽しさを一人でも多くの子どもたちに伝えるためにも、リンク環境の改善から目を背けないことが、私たちの役割だと感じている。そのためにも、地方財政が厳しいことは十分理解しているが、今よりも期間の延長、リンクの大きさ等の改善を望みたい。

スケート場建設については、行政とスケート協会が協力しあい、連携をとりながら実現するものだと考える。その場しのぎの対応ではなく、物事の本質を十分見極め、お互いに腹を割って話し合い、将来汚点にならないようにすることが大切だと思う。とかくその場しのぎの対応は、逆に高くつくことが過去のケースからも明らかである。

スケート場は、多目的かつさまざまな付加価値を生む施設である。レジャーの要素もあれば生涯スポーツの要素もある。また、競技スポーツ・学校教育の場を併せ持つ施設でもある。さらには、休日には、家族・親子連れでスキンシップ、コミュニケーションの場にもなっている。その他にも、スケート教室の開催、クラブ活動や競技会の開催、学校の課外授業にとフル活用されている。こんな付加価値を持つ体育施設は他にはないのではなかろうか。これにプラスして中央のイベントとか強化合宿等を誘致すれば通年型でも十分に成り立つし、同時に滞在による宿泊費など地元への経済効果ははかりしれない。また、フェンス広告等を活用し収益をあげることも可能と思われる。

今後の競技団体のあり方だが、これまでは、とかく行政に「おんぶにだっこ」してきたことも否めないが、そうした体質を変えていく必要がある。これは、スケートの競技団体だけでなく、全ての競技団体について、そのことが問われる時期にきていると思う。

そのためにも、役員は一人ひとりが肩書きにこだわらず、自らが出来る限り努力することである。また、選手は、感謝の気持ちを忘れずに練習に励んでいただきたい。

庄内



庄内スケート協会
副会長

富樫 惣一

ギューアスケート部を招待し、「シンクロナイズドスケートティング」のデモンストレーション演技を披露していただいた。

さて、山形県内のフィギュアスケートについては、よく山形県のお家芸といわれるスピードスケートと比べると、強化費は比較にならないくらい少ない。また、1年を通して行っているリンクがないためプロコーチも来ない。競技団体の役割は選手づくりの前に指導者の養成につきるのだが、山形県内にはフィギュアスケートを専門に指導できる人材が少なく、そのため、アマチュアコーチ一人ひとりにかかる負担が大きいのが現状である。

フィギュアスケートの人気が高まるのとは逆に、全国的にリンクの状況は深刻になっている。私たちとしては、まず選手・役員が魅力を感じる環境づくりから始めなければならないと考えている。いずれ

■ 富樫 惣一 (とがし・そういち)

有限会社鶴食 常務取締役。

1960年1月 山形県鶴岡市生まれ。

(財)日本スケート連盟フィギュア部常任委員兼バッジテスト副部長兼強化委員、山形県スケート連盟フィギュア部長兼副理事長・庄内スケート協会副会長。

〒997-0019 鶴岡市茅原字草見鶴18-21

ライフサポートハウス千寿2F

TEL 0235-29-4050・FAX 0235-29-4708